

地方創生最前線

# 生涯活躍のまち

2022.12

33

特集 新しい人の流れ



## INDEX

逆参勤交代はネクストステージへ 松田智生 さん	2
逆参勤交代が導く新たな生き方の可能性 光行恵司 さん	4
与えられた運命を愛せよ ~映画『ただいま、つなかん』の風間研一監督に聞く~	5

## BOOK REVIEW

筋肉がかんを防ぐ。専門医式・1日2分の「貯筋習慣」 (石黒成治 著/KADOKAWA)	7
--	---

人口の東京一極集中と高齢化が同時に進むことで、首都圏では介護人材不足が深刻になり、13万人の高齢者が「介護難民」になるといわれたのは2010年代半ばのことだった。その流れから日本版CCRC構想が謳われたわけだが、三菱総合研究所の主席研究員である松田智生さんは、首都圏のビジネスマンを地方に送り出す「逆参勤交代」を提唱した。観光以上、定住未滿。その土地に住所を移すことはできないものの、一定期間滞在し、リモートワークをするとともに、地域の課題解決に自分のスキルを使って一役買う、という新しいワーケーションのあり方である。関係人口・交流人口を拡大するだけではなく、私たちの働き方を大きく変える可能性もあるものだ。逆参勤交代が「地方創生と働き方改

革を同時に進める」といわれるゆえんである。一方で都会から地方へ移住する若者たちもみられる。たとえば東日本大震災のボランティアで東北の被災地へ支援に入った学生たちだ。彼ら、彼女らは支援をする側として現地に入ったのを機に、従来の都会での暮らしから地域に根差した生活へと人生の舵を切ったのである。それはどうか。10年以上に渡る宮城県気仙沼市での取材を基にドキュメンタリー映画『ただいま、つなかん』を制作した風間研一監督によると、「楽しいからではないか」という。「○○しなければならぬ」ではなく、「○○したい」が人を行動に駆り立てる。それが「新しい人の流れ」といえるのかもしれない。

# 逆参勤交代は ネクストステージへ

松田智生さん  
MATSUDA Tomoo

株式会社三菱総合研究所  
主席研究員・チーフプロデューサー



1966年東京生まれ。慶應義塾大学法学部政治学科卒業。専門は超高齢社会の地域活性化、アクティブシニア論。高知大学客員教授、丸の内プラチナ大学副学長を務める。政府日本版CCRC構想有識者会議委員、内閣府高齢社会フォーラム企画委員、内閣官房地方創生×全世代活躍のまち検討会委員、国土交通省共助の地域づくりのあり方検討会委員、浜松市地方創生アドバイザー、長崎県杵岐市政策顧問、高知県移住推進協議会委員、著書に『日本版CCRCがわかる本』『明るい逆参勤交代が日本を変える』。

## 人材の争奪でなく共有を

「逆参勤交代」という言葉を初めて聞いた方に説明したい。1635年に江戸で始まった参勤交代は制度をもって江戸の関係人口を増やすことであった。それによって江戸では藩邸が整備され、全国に街道がつくられた。逆参勤交代はその人の流れを反対にする。都市居住者が地方で期間限定型滞在をし、リモートワークで本業を行いながら、週に数日は地域のために働くことで地方創生と働き方改革を同時に実現するというものである。地方ではオフィスや住宅、ITインフラが整備され、宿泊施設の稼働率も向上するだろう。内閣官房の定義による「都市と地方の人材循環」である。

逆参勤交代が生涯活躍のまちを加速させることで、「生涯活躍のまち」アドバイザー<sup>※</sup>と自治体との連携の未来について見えてきたことを語りたい。

現在、逆参勤交代の実装実験を全国各地で行っている。今年度(2022年度)は政令指定都市から人口数千人の市町村まで新たに5カ所で取り組む予定だ。その際に重要なのは動機づけである。われわれは事前に東京でインプットセミナーを開催。受け入れ側となる地方自治体の方から地域の魅力、課題、関係人口、逆参勤交代への期待などを話していただき、参加者は「自分は何で貢献できるか」を考える。

「都市と地方の人材循環」については、これまでIT、ベンチャー、いわゆる「意識の高い系」、自分探しの若者やシニア、フリーランスなど限られた人材を地方が奪い合いをしていたが、たとえば、東京の大手町、丸の内、有楽町地区の就労人口は28万人、約4,300の事業所がある。うち、上場企業の本社は約100社、売上高は約120兆円に上る。同地区のビジネスマンが逆参勤交代を実施すれば、スモールボリュームからマスボリュームへの拡大が可能になるだろう。それによって地方間で都市の人材を争奪するような不毛な競争は解消されるはずだ。

<sup>※</sup>生涯活躍のまちの取組を普及促進するため各圏域で中心的な役割を果たすアドバイザー人材を育成するための研修。令和元年～2年度にかけて内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局(当時)によって育成研修が実施された。

## 企業にとってのメリット

逆参勤交代は都市居住者が地域の人々と関わりながら、地元の課題を掘り起こして、その解決を目指す。Work(しごと)+Communication(交流)、Education(学び)、Contribution(貢献)=ワーケーションであるべきだ。人材を送り出す企業のメリットとしては、働き方改革(ワークライフバランスの向上、兼業・副業の推進)、人材育成(若手・中堅の武者修行、新卒採用、シニア流動化)、ビジネス強化(ローカルイノベーション、販路開拓、廃業問題)、健康経営(社員のメンタルヘルス予防、健康経営が業績寄与)、SDGs(逆参勤交代銘柄、企業価値)が挙げられる。

なかでもSDGsについては、「8 働きがいも 経済成長も」ならびに「11 住み続けられるまちづくり」との親和性が高い。経営者の多くが懸念しているのは、SDGs投資が進まず自社の株価が下がってしまうことだ。逆参勤交代による「新しい

## 地方副業・兼業の可能性

今回ご紹介する株式会社デンソーの光行恵司さんは、長崎市壱岐市での逆参勤交代トライアルに参加し、同市に対してコロナ禍でも可能なデジタル逆参勤交代、すなわち人の移動がなくても地域経済に貢献できる地元特産品のオンラインショッピングを提案した。ふるさと納税や商品の活性化につながるものであり、それ以外にも空き家を改修したゲストハウス・プロジェクトが進行中である(詳細は後掲)。なお、光行さんは逆参勤交代トライアル参加がきっかけで、副業として中小企業の新工場建設アドバイザーを務めるにいたっている。

## 逆参勤交代で人生が変わる

コロナ禍以前に行った鹿児島県奄美群島のひとつ、徳之島のトライアルでは地元高校生向けのキャリア勉強会を行っ



2022年7月1日~3日に実施した長崎県壱岐市トライアル逆参勤交代。中央左は白川 博一市長、同右は松田智生さん。

人の流れ」が目指すのは、「1億円の売り上げ」ではなく、「100円の株価向上」である。

## 主語は自分

われわれが各地で行っている参勤交代トライアルでは、最終日に首長向けプレゼンテーションを行っている。そこで設定しているルールが「主語は自分」だ。まちづくりに対するアドバイスで陥りがちなのは相手主語=「あなたのまちは〇〇すべきだ」で話してしまうこと。そうではなく、「私は、あるいは私の会社は〇〇ができる」という提案型にしていく。

北海道の上士幌町では、参加者の一人だったアクサ生命保険の大野雅人さんが同町の竹中町長にSDGsの推進(詳細は弊誌20号を参照)を提案したところ、それが採用され、町役場のSDGsアドバイザーに就任した。そして職員向けの勉強会などを行い、再生可能エネルギー(バイオガス発電)の推進やふるさと納税を活用した子育て・教育環境充実化に取り組み、上士幌町は令和2年度に国の「第4回ジャパンSDGsアワード」を受賞した。

た。建築家、医者、エンジニア、起業家など参加者が自らの経験を高校生に話すというもので、なかでも注目を集めたのは勤めていた会社が破綻してしまった元証券マンが現在は農業を営んでいるという「しくじり先生」の失敗談だった。熊本県南阿蘇村で被災地の中学生と行った交流会では、よそ者から見た村のよさや復興について話し合った。過疎地や被災地の子どもは自己否定感が強い傾向にあるのだが、多世代交流によって自己肯定感が生まれるだけでなく、逆参勤交代の参加者も多くを学ぶのである。

## 一歩踏み出す勇氣

「私」が逆参勤交代に取り組もうとする際に注意しなければならないのは「新たな挑戦を阻む不条理症候群」だ。ダメ出しをしたら天下一品で、できない理由を挙げるのが得意な批評家が蔓延する「否定語批評家症候群」、*“あなたのまちはこうすべきだ”*という主語が他人で当事者意識のない「他人主語症候群」、酒の席では雄弁だが、現場では急に沈黙する「居酒屋弁士症候群」なども挙げられる。これらの「症候群」を克服して、皆さんも第一歩を踏み出してほしい。

# 逆参勤交代が導く 新たな生き方の可能性

光行恵司さん 株式会社デンソー 東京支社長  
MITSUYUKI Keiji

1962年名古屋生まれ。1986年京都大学大学院工学研究科修士課程精密工学専攻修了。2007年大阪大学大学院工学研究科論文博士。株式会社デンソーに1986年入社以来、生産技術、生産企画、情報システムと幅広くモノづくりをハード、ソフトの両面から変革していくことに従事。2019年より現職で新事業・研究領域の開拓、産官学連携を推進。2021年よりコンサルタントとして副業を開始している。



## 東京一極集中と人口減に衝撃

私は1986年に入社以来、生産技術、生産企画、情報システムなど、ハード、ソフトの両面からモノづくりに携わってきた。いわゆる生産畑で働いてきたのだが、2019年に弊社の工場のない東京支社に赴任となり、現在は新事業領域の開拓、産官学連携の推進に従事している。

東京に出てきた人間が地方に関心を持ったのは、赴任した年の2月に開催された第180回政策シンポジウム「地方創生X働き方改革X人材循環型社会」のなかの「ポスト平成時代の働き方、住まい方、暮らし方、生き方～新たな人の流れを創る人材循環型社会/地方創生ビジネスとは?～」に参加したのがきっかけだった。東京への一極集中が進み、2018年の首都圏への人口流入過多は13万人という数字に衝撃を受けた。13万人とはデンソー本社のある愛知県刈谷市の人口に等しい。名古屋圏の人口は2021年まで9年連続で流出過多となっていることも知った。

上記のシンポジウムで三菱総合研究所の松田さんとの出会い、「人口減少の日本で移住者のパイを奪い合うのは不毛」「観光以上、定住未満の関係人口がこれからの地方の時代を創る」「リモートワークとバケーションによるワーケーションへの疑問符」「意識の高い人、自分探しの若者とシニアだけではダメ」という話に共感し、2019年9月に長崎県壱岐市で行われた逆参勤交代トライアルコースに参加した。

## バーチャル逆参勤交代

初めて訪れた壱岐市はとても魅力的なところだった。日本のモンサンミッシェル<sup>\*</sup>ともいわれる小島神社、青い洞窟のある辰の島のほか、イルカと触れ合えるイルカパークや風情漂う夜の港町も体験した。「食」については新鮮な魚介類だけでなく、壱岐のブランド牛が全国に出荷されていること、麦焼酎の発祥の地であることを知った。そして「人」。空き家再生やイルカパークの再生に取り組む方々、市長をはじめとした市役所の皆さんにオープンマインドで接していただいた。

首長向けプレゼンテーションでは、弊社がQRコードを開発したということもあり、「神の島」壱岐の千社デジタル化プロジェクトを提案した。鳥居にQRコードを張りつけ、デジタル御朱印とスタンプラリー特典で壱岐市を楽しみ、滞在時間やリピーターを増やすというものである。

ところが、トライアルの後にコロナが来襲。島を再訪できなくなった。そこで観光客が減って困っている壱岐市のためにZOOMによるバーチャル逆参勤交代を2020年5月に行った。

イルカパークのある勝本朝市をZOOMで中継してもらい、こちらは現地の方と掛け合いをしながら、アジの開きやウニの缶詰などの名産を買うというものである。これはふるさと納税の体験メニューのひとつ“オンライン朝市”として発展した。

※フランス・ノルマンディー地方の四方を海で囲まれ全体が要塞ようになった岩山の上にある街。

## 仲間とのコラボレーション、出会いから副業へ

壱岐の逆参勤交代で参加者のひとりとして知り合ったインテリアデザイナーの手を借りて、長野県の八ヶ岳山麓にある別荘の改修をしているのだが、その際にうれしい偶然があった。八ヶ岳山麓に隣接した長野県諏訪市と壱岐市が姉妹友好都市を結んでおり、7年ごとに諏訪大社で取り換えられる御柱の一本が壱岐市に送られていたのである。今年7月に再訪した際に見ることができ、不思議なご縁を感じた。

また、2020年12月に「長崎創造型ワーケーション@壱岐」に逆参勤交代メンバーとして参加し、イルカパークでテレワークをしていたところ、プロフェッショナルに特化した人材サービスとソリューションサービスを提供する株式会社みらいワークスの岡本祥治社長と出会った。弊社は副業が認められているので、早速、みらいワークスのサイトに登録。翌年2月に個人事業主開業届を提出したところ、副業マッチングサイトにおいて群馬県で新たに立ち上げられた工場の支援をするというご縁をいただいた。

現在は月に1回程度で工場を訪問し、社員の目線を合わせる（社員との経験知の差が大きいので、経験、手法の押し売りをしない）、経営者の「想い」と過去の経験からくる「思い込み」を整理すること（本質的な問題、欠けている視点を共有）の大切さを理解してもらい、若手キーマンとの関係づくりを進め、工場運営の変革のお手伝いしている。

## 逆参勤交代の定着へ

壱岐市で現在、取り組んでいるのは「空き家再生第2のふるさと投資～逆参勤交代 壱岐屋敷プロジェクト～」である。壱岐市は古来、日本の歴史をつくり上げてきた要所であり、いまま日本の原風景に包まれる素敵な島だ。「観光以上、定住未満のあなたの心、人生を豊かにする第2のふるさとを創りませんか」というキャッチフレーズで、壱岐を好きになった人が滞在できるゲストハウスをつくろうとしている。都市部の住民（諸藩大名）が、丸の内プラチナ大学（逆参勤交代奉行）および壱岐市東京事務所（壱岐の江戸屋敷）と連携し、空き家再生オーナー（壱岐屋敷大名）となって自分の第2のふるさと兼ゲストハウスを運営し、自らの拠点をもつことで関係人口として定着する。逆参勤交代でわかったのは、関係人口のポイントは人とのつながりであり、少しの勇気と美点凝視の精神からすべてが始まるということだ。



# 与えられた運命を 愛せよ

～映画『ただいま、つなかん』の  
風間研一監督に聞く～

東日本大震災に見舞われた宮城県気仙沼市唐桑半島にある<sup>しびたち</sup>鮪立で100年続く牡蠣の養殖業を営む菅野さん一家。その後、さまざまな苦難に直面するものの、学生ボランティアとともに再生を目指して歩む年月を描いたドキュメンタリー映画が『ただいま、つなかん』です。「つなかん」とは鮪立と菅野の頭文字（鮪=つな+菅=かん）からとった民宿「唐桑御殿つなかん」のこと。女将さんとなった菅野一代さんの明るく前向きな姿を追った作品ですが、学生ボランティアとして気仙沼に来たのを機に移住した若者たちの成長の物語にもなっています。2023年2月の劇場公開を前に今号では本作の監督である風間研一さんに話を聞きました。



かざま・けんいち 1977年横浜市生まれ。立教大学理学部化学科卒。テレビ情報番組のADを経て文化工房に入社。2019年からはディレクター・プロデューサーとして自作制作番組などに携わる。自閉症の芸術家を追った『作品は語る』（2012年）、民宿つなかんの料理長（当時）を追った『僕は今ここにいる』（2016年）で民教協スペシャル優秀企画賞を受賞。初監督となる『ただいま、つなかん』は2023年2月下旬より東京・ポレポレ東中野、宮城・フォーラム仙台ほか全国順次公開予定。公式サイト <https://tuna-kan.com/>

——『ただいま、つなかん』を撮り始めたきっかけを教えてください。

2011年3月11日の東日本大震災の時、テレビ朝日の情報番組で企画・制作に取り組んでいた私は半年後に気仙沼の取材に入りました。そして翌年1月、「震災から1年」という企画を考えていたところ、『河北新報』で「気仙沼市の唐桑半島でボランティアを支援する被災者がいる」という記事を読んだのです。「ボランティアが支援をする」のではなく「ボランティアを支援する」とはどういう人なのか、ぜひ取材をしたいと思って企画書を出し、2012年2月末に現地へ向かいました。

半年前の取材では、まちが消滅した後の地盤沈下がひどかったことが強烈な印象として残っていたので、暗い気持ちで現地に入ったのですが、当人の菅野一代さんに会ったとき、「こんにちわー」と明るく元気に挨拶されて驚きました。

——この明るさは何なのだろう？ というのが関心の始まりだったんですね。

唐桑半島はまだ復興が進んでおらず、人も少なかったので彼女の声が響くんですよ（笑）。被災者のイメージを覆されました。それは私に限らず、学生ボランティアをはじめ訪れた人の多くもそうだと思います。一代さんは私を当初「風間さん」と呼んでいましたが、3日目には「かざまっち」になっていました。

——夫の和享さんはどんな方なのですか。

シャイで無口。最初にお会いしたときに「こんにちは」と言ったら、素通りされました（笑）。（取材を）嫌がられているのかなと思ったのですが、船上での撮影では、たくさん風景が撮れるようにとあえて遠回りをしてくれるなど、さりげない心配りをしてくださる優しい方でした。



——当時は単発のテレビ番組をつくる予定だったとか。

2回目の取材は2015年でした。すでに民宿「唐桑御殿 つなかん」は完成しており、そこに集まった学生ボランティアたちも取材し、番組を完成させたのですが、ボランティアの若者のうち何人かが気仙沼に移住していることを知って「つなかん」のこれからもフォローし続けなければと思いました。すると翌年に若者たちが「つなかん」で同窓会をするというので私はひとりでカメラをもって出かけたんです。この時点では番組化の予定はまったくありませんでした。

——若者たちは、まちづくり会社を立ち上げたり、漁師さん向けの食堂と銭湯を経営したり、豊かな海を守るには森林の整備が大切と林業に従事したり、いろいろな仕事を始めますね。

東京、奈良、兵庫など出身地もいろいろですが、共通しているのは「唐桑が好き」ということ。それがあからどんな環境でもやっていけるのでしょうか。一代さんはじめ、困ったときに素直に甘えられる地元の方々がいることも大きいと思います。

——一代さんは移住者を受け入れる側の心得として、「安心しておいで」というオーラを出すことが大事」と言っていました。ご自身も岩手県久慈市からお嫁にきた「移住者」だからその言葉だと思います。

学生ボランティアは「一代さんたちを助ける」というよりも、「一代さんたちといると楽しい」から来ているのだと思うんです。



「つなかん」女将の菅野一代さん



菅野和享さん・一代さん夫妻とかつての学生ボランティアたち

民宿「つなかん」のお客さんには企業の経営者の方なども訪れます。女将さんである一代さんは、相手の肩書がどうであれ、変わらず同じように接する。それが居心地いいのでしょうか。

—— この作品は学生ボランティアの成長物語のようにも見えました。とても近いからこそ撮れたと思うのですが、取材対象との距離感はどうに取っていたのでしょうか。

相手と仲良くなっても、相手が話したくない、心をえぐられるような問いかけをしなくてはならないときもあります。一代さんに海難事故に関わる質問をしたときは、事前に「これから一代さんが話したくないことを聞きます」と伝えました。一代さんも覚悟をもって応えてくれました。そういうときの彼女は普段のフランクな口調から「です・ます」に変わる。私たちの関係を理解してくれるんですね。取材対象者と一定の距離感を保っていないとドキュメンタリーはつくりえないと思います。

—— 撮影は11年に及びました。区切りをつけるのは難しくなかったですか。

私自身「いつどのように終わるのか」を考え始めたのが2019年頃。震災10年の2021年3月11日で終わることをめどにしていたのですが、コロナ禍によって延びてしまいました。「つなかん」は民宿という業態上、大きな影響を受けざるをえなかったからです。その後、一代さんが東京で開催されたイベント『生活のたのしみ展』に出展をするため東京へ行く決断をしたとき、「ここだ」と思いました。

—— 外から来た人を受け入れる側から、「つなかん」のプロモーションのため、外に打って出る姿勢に転じたときですね。

これまで一代さんは被災者の立場から震災の語り部とし

て、あるいは牡蠣の直販のため東京に出向いていたのですが、海難事故の後は「つなかん」に籠っていた。再び立ち上がるまでに時間が必要だったのでしょうか。

—— 東日本大震災以降の一代さんは苦難続きですが、逆境に対して笑いをもって乗り越えてきたように見えました。悲しみや苦しみを紛らわすためではなく、もっと根源的なところから出てくるような笑顔。試写会でのパンフレットに寄稿された立教大学の小倉康嗣教授は、彼女の姿にヴィクトール・E・フランクルの『夜と霧——ドイツ強制収容所の体験記録』を重ねて、同書の「われわれが人生に何を期待するかではなく、人生がわれわれに何を期待しているかということこそが問題なのだ」という一節を引用しています。

一代さんは義父に言われたという「与えられた運命を愛せよ」を座右の銘にしています。それともつながっていると思います。岩手から嫁に来て、いきなり牡蠣の殻剥きをさせられても、当たり前のように取り組んで、やがて地域で一番の殻剥き名人になる。震災後も変わらず、自分に与えられた試練と真摯に向き合う姿勢を小倉先生はそう表現したのではないのでしょうか。

—— 語りは俳優の渡辺謙さん、音楽は気仙沼出身のピアニスト・作曲家の岡本優子さんですね。

渡辺さんは気仙沼でできた多くの友人のためにカフェ「K-port」をオープンし、特別ではなく日常の場として運営されています。岡本さんが東日本大震災を受けてつくった「Prayer」という曲に感銘を受けた私は「音楽は岡本さんに」と決めていました。お2人に手紙を書いたところ、快諾いただきました。多くの方々の協力を得て本作ができたことを本当に感謝しています。



「つなかん」を訪れたかつての学生ボランティアを見送る面々



気仙沼市唐桑半島

# BOOK REVIEW



筋肉ががんを防ぐ。  
専門医式  
1日2分の「貯筋習慣」  
KADOKAWA  
著者 石黒成治

孤立しがちな高齢者にとって「きょうようときょういく」が必要とはよくいわれることだ。「きょうよう」は「今日、用事がある」、「きょういく」は「今日、行くところがある」。外へ出かけることの大切さを説く言葉だが、もうひとつは「ちょきん」。2019年6月に金融庁の金融審議会市場ワーキング・グループが報告書に「老後は2,000万円必要だ」と記し騒動になったことは記憶に新しいが、本書でいう「ちょきん」は「筋肉を貯める」こと。加齢によって筋肉が加速度的に失われるサルコペニア(加齢性筋肉減弱症)を抑えるためには、筋トレで分泌されるホルモン、ミオカインが大事な役割を果たす。運動することで免疫細胞を活性化させ、がん細胞の増殖を制御するので、がんだからとベッドで安静しているのは逆効果だ。がんと診断され、入院・手術された人にも著者は筋トレを勧める。

DMN(Default Mode Network)をご存知だろうか。脳が無意識かつ自動的に活発になる脳機能ネットワークの意味で、DMNが過剰に活動することで「雑念」や「思考」が止まらなくなる。したがって、脳を休めるには、十分な睡眠をとる、緩めのお湯に浸かる、瞑想をする、が効果的なのだが、もうひとつは運動。身体を動かすことによって普段仕事で使っている脳を解放することができる。筋トレが限界に近づいたときの状態を想像してほしい。「〇〇をいつまでに片付けなくては」なんて考えるだろうか。目の前の負荷をクリアすることに集中しているので、仕事のことなど頭から飛んでいるはずだ。一方、身体を動かさず、単に休んでいると、脳は自ずと仕事のことなど、あれやこれやを考えてしまう。結果、心も身体も疲弊していくのである。

がんを防ぐためだけでなく、運動、ひいては筋トレが脳と心と身体にいか「効く」かがわかるだろう。厚生労働省が定める運動習慣の定義は「最低週2回、1回につき30分以上、それを1年続ける」という。運動嫌いの方にはハードルが高いかもしれない。大腸がんを防ぐプランク、ヒップリスト、スクワット、乳がんを防ぐプッシュアップ、鎖骨下筋トレ、転倒骨折を防ぐクラムシェル、もも上げダッシュ。スキマトレとしてワンレッグアップ、壁つきプッシュアップなどなど、ちょっとしたことから始めて、それが生活の一部になっていけばしたものだ。写真やイラスト、データを示した表などがたくさんあるので、手に取って実践してほしい。ぽっこりおなかをひっこめる、頑固な便秘を直す、健康寿命を延ばす、などのため、著者の「生活習慣」オンラインスクールに参加した方々の体験談もあなたの背中を押してくれるだろう。

(芳地隆之)

## Information

### ● 日本知的障害者福祉協会の全国大会をメタバースで開催。

同協会の2023年の全国大会はメタバース開催となりました。本大会では毎年、障害者の就労でつくった商品をリアルマーケットで販売しているのですが、地方都市でかつコロナの感染の状況が読めないなかで開催が懸念されていました。そこで、雄谷良成・理事(北陸地区代表)が(株)アクロスロードの津田社長の協力を得て、メタバースと福祉の融合を進めることになりました。初日の鼎談では、雄谷理事、津田社長とともに、よしもとセールスプロモーション取締役の山地克明さんが加わります。障害福祉、メタバース、そして笑いの出会いがもたらす新たな景色。福祉の世界では画期的な試みですが、福祉に携わる方以外にも今後のコミュニケーションのありかたを知る機会になると思います。ぜひ参加をご検討ください。詳細はHPにて。



<http://www.aigo.or.jp/archives/2022/10-4.html>



### ● 小誌『生涯活躍のまち』を購読しませんか。

毎月のデータ配信として発行している小誌は、全国で「生涯活躍のまち」に取り組んでいる自治体や事業者の声を紹介しています。小さなメディアですが、お互いの経験や情報を交換するツールとして、地域の誰もが居場所と役割をもち、最期まで安心して暮らしていけるコミュニティづくりに貢献できればと思っています。お近くの方にもぜひ小誌をご紹介ください。

1部300円(税込・送料込)です。購入ご希望の方は、当法人ホームページでバックナンバーをお確かめのうえ、下記までご連絡ください。



『生涯活躍のまち』  
購読お申込み、お問い合わせ  
電話 0265-98-0481  
ウェブサイト <https://shougai katsuyaku.town/>  
※携帯の方は左のQRコードをご利用ください。



### 編集後記

日本版 CCRC のスタート当初、私たちは移住を検討している方々(とりわけ高齢者)に、その土地のよさ——豊かな自然、美味しい食べ物、人の温かさ——を伝えるだけでなく、その人が新天地でどのような生活を送りたいのかを聞き、その実現を現地で働きかけてきました。しかしながら、なかなかうまくいきません。移住をする側と移住を受け入れる側のニーズが、うまくマッチングできなかったからです。両者の思いのどちらをとるかといった2者択一的な発想にどうしてもなってしまう。そこに自治体や企業の思惑も入れて、もっと緩い形で人が動けるようにしようという逆参勤交代の発想は目からうろこでした。『ただいま、つなかん』に登場する若者たちはフットワークも軽やかに地域に入り込むのですが、菅野一代さんをはじめ、「彼ら、彼女らが甘えられる人」の存在が大きいと風間監督はいいます。逆参勤交代と若者の移住。形は違えど、いろいろな人の立場や思いが「新しい人の流れ」をつくることでは共通していると思います。

(芳地隆之)

## 生涯活躍のまち推進協議会では、 ひろく会員を募っています。

私たちは日本版 CCRC 構想有識者会議で出された「生涯活躍のまち」の方針の具現化を支援する役割を担うため、2015年10月9日に任意団体として発足。2016年2月に一般社団法人化されました。人口減少、少子高齢化が進むなか、持続可能な地域コミュニティをつくっていくにはどうしたらいいか。そこに立ち上がってくる様々な課題と向き合う自治体の皆様、地方創生の事業化を目指す民間企業や団体、あるいはまちづくりにご関心をおもちの個人の方々に、私たちは、各地域の特性に合った「生涯活躍のまち」を推進していくための支援を行っています。

国が、市町村が、事業者が、そして多くの思いある個人が集い、情報交換をし、知恵を出し合うことで課題解決の道筋をつけていく。生涯活躍のまち推進協議会は、そんな方々のためのマッチングの場を構築することを目指していきます。

正会員	年会費15万円
利用会員	年会費10万円
賛助会員	年会費1口1万円
アドバイザー会員	無料

一緒に生涯活躍のまちを  
つくっていきましょう。



(一社)生涯活躍のまち推進協議会

0265-98-0481

✉ info@shougaikatsuyaku.town

<https://shougaikatsuyaku.town/>

〒399-4112 長野県駒ヶ根市中央9番7号 (公社) 青年海外協力協会内

